初段へ　小西哲二、峯岸鎭治、吉岡修治、中村壯吉、中島廸吉、菅井國之助、山本忍巳、小野好郎

○十月二十七日編入せられたる者

二級へ　山本良太郎

○十一月三日の大會勝負の結果

幼年組二級へ　長塚芳太郎、江口重國

幼年組一級へ　南野次郎、伊藤巖

二級へ　山本誠一、坂本信吉、田中兼四郎

一級へ　岡安寛司、土屋義雄（以上編入）、池野梅三、近岡源三、藤平眞

○十一月二十六日の月次勝負の結果

幼年組二級へ　上原千馬太

一級へ　海東要造

一五　明治四十四年史

（一）寒稽古

今年の寒稽古は一月の十三日から二月十一日迄三十日間行はれた。朝の四時から殘月を蹈みしだきて綱町に參集、エイ

ヤの掛聲勇ましく、百十九疊の道場も狭い程の賑ひ、眞に骨鳴り肉躍るの感があつた。終了式は午前八時より始まり、師範の講話の後、朝餐の饗應があつた。榮譽ある皆勤の月桂冠を得た者は左の百十六名で、中に精勤の賞を授けられた者が六名あつた。

師範　飯塚國三郎
四段　塚本　太作　石渡泰三郎
二段　高橋順之助　松尾恒四郎　近藤　謙治
初段　飯塚　茂　小野　好郎　村山　義一　吉岡　修治　山本　忍己　塚本福治郎　菅井虎之助
中島　廸吉

一級　柳澤　德治　南野　次郎　近岡　源三　岩崎　尙武　早川　重雄
二級　島　泰次郎　長塚芳太郎　幸島　正路　三代川陸質郎　茂木三千藏　江口　重國　尾上　繁二
三級　幸田　義　後藤　豊吉　田中兼一郎　杉山　豊弘　橋本　廉平　近藤　久　和田　義隆
伊藤　常三　御園生　讓　久留島健二郎
四級　曾谷　泰學　白方　梅吉　藤原惣次郎　小口　清美　金子　友八　中川　正郎　正部家種良
本間保次郎　桑原　政憲　山本　忠清　岩崎彌一郎　大隅　登山　神谷　嘉一　齋藤　耕作
吉澤　憲次

甲組
雨宮市太郎　山浦　久吾　松浦　新平　堀口　藤平　澤原　亮吉　青木　音次　長谷川三郎
寺島　辰巳　加藤　六藏　浦邊　景造　三瀬德太郎　德弘　虎雄　永井好一郎　美濃口勝次
山崎　儀重　工藤　得三　高平慧太郎

乙組　土屋　勇　臼井　吉郎　馬屋原八壽二　山岡愼一郎　井上　松造　伏見　正三　笹島治兵衛
　　大木　勇
組外　山本　晴次　小野　欽吾　鈴木　豊次　佐藤　英二　安武　與助　中野　昇　吉武　一雄
　　藤田　耕一　佐々木善次郎　北見　甚吉　梶原　省三　佐野俊之助　柳田　孝　田宮　郁三
　　程野庄次郎　土屋　梅吉　品川　氏清
幼年組
五級　田中　健吉　梶原　孝治　茂木信太郎　北村　孝次　永井信二郎　吉田　五郎　上野　稔雄
六級　岩井　茂　青木芳太郎　福田善次郎　伊澤雄次郎　小野田幸治　川北吉次郎　伊東好太郎
七級　西澤久一郎　金子　健藏　中村　謙
八級　鈴木健之助
級外　飯塚　滿明　庄司　新次　廣瀬喜太郎
無級　久保田千代吉　宮崎　宜郎
精勵者
初段　山本忍已　一級　近岡源三　岩崎尙武　南野次郎　三級　和田義隆　四級　正部家種良

（二）無段者月次勝負と五人掛

二月五日寒稽古中に無段者の月次勝負が行はれた。取組數實に百二十七番に達し、稽古が進んだといふ師範の讃辭に勵

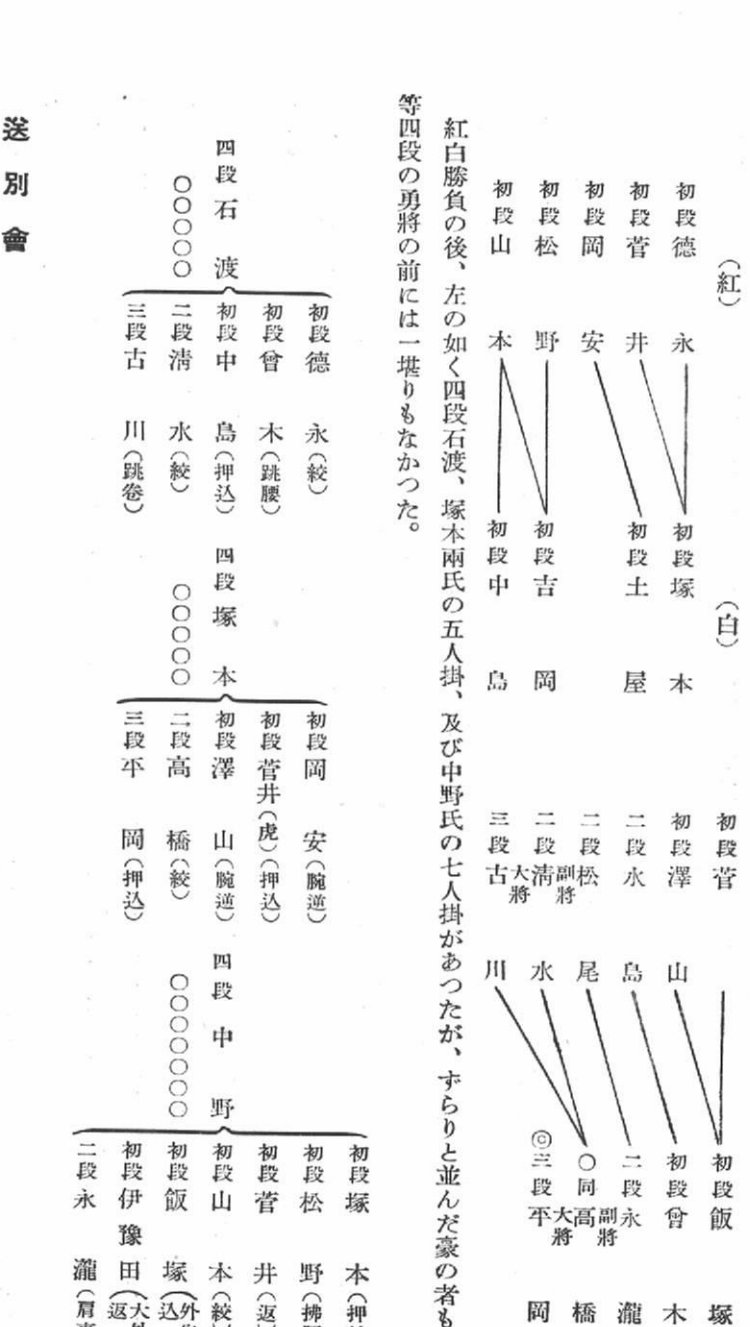
まされて、皆元氣一杯で奮戰した。それが終つてから今回昇段された塚本（福）、德永、菅井（虎）の五人掛、及び中野四段の七人掛あり、塚本氏は全部を拔き、德永氏は五人目の池野に敗れ、菅井氏は四人目の幸島に名を成さしめ、中野氏は七人目の平岡と引分になつた。

又六月十七日（六十番組）と十月七日（五十七番組）にも無段者月次勝負あり、後者では試合後初段守谷正毅、池野梅三、澤山福彌太、二段伊豫田三郎、關義雄、及び飯塚茂諸氏の五人掛が催された。守谷氏は五人目の島氏と引分、池野氏は先鋒を承つた二段の元氣者高橋篤の左跳腰に最後を遂げ、澤山氏は四人目の岩崎（尙）の背負に屍を曝し、二段の關氏は四人目柳澤氏の合業に退き、最後の飯塚氏は龍虎の勢もて四人までも止めを刺したれども、强敵菅井（國）の押込に敗れた。

（三）卒業生送別紅白勝負

二月十九日午前八時より擧行、兩軍（紅は六十八名、白は六十六名）守備を嚴にし、我こそ今日の一番槍の功名を揚げんものと武者振ひせる樣は、勇ましい光景であつた。白軍の池野が四人を投げて氣勢を揚げ、勝負は進んで有段者の接戰となり、白軍の副將高橋は、紅軍副將淸水を投げて、大將古川に向つた。古川は當日腕の負傷をも顧みず、六十有餘の將卒を率ゐて出場せるもの、何を猪口才なと猛ける高橋をあしらつたが、紅軍の武運や拙かりけん、古川は銳き高橋の出足拂の爲に果敢なき最後を遂げ、優勝旗は白軍の大將平岡の手に落ちた。

此の頃は試合者も多くなつてゐるので、玆には最後の部分有段者の取組丈けを載せる。



紅白勝負の後、左の如く四段石渡、塚本兩氏の五人掛、及び中野氏の七人掛があつたが、ずらりと並んだ豪の者も、此等四段の勇將の前には一堪りもなかつた。

送別會

右紅白勝負の終つた晩、芝浦『いけす』で開會。先輩、卒業生及び部員、三々伍々七十有餘人詰かけ來りて、この日の

勝負の噂とり〴〵、氣焰萬丈當る可らずといふ有樣であつた。

定刻幹事の號令で食膳に向つてから、人々そろ〳〵耳のあたりが赤くなつた頃、中野幹事部を代表して、我が部が卒業の諸君及び先輩より受けたる多大の盡力を謝し、之に報ゆるに、部員は宜しく大々的奮闘をなし、光輝ある精神を永へに殘さゞるべからずと述ぶれば、塚本太作君は被送別者を代表して、部員の奮闘を望み、卒業生はたとへ校門を出づるとも今後益々柔道部の爲に犬馬の勞を取るべき旨を誓はれ、又古川君は須らく大なる確信を以て奮闘せよと、部員を勵ます所あつた。

盃は卒業生の上戸黨首領、塚本、石渡兩君に向つて總攻擊となり、歡興湧く所或は高調子の歌となり、或は腕押となり或は角力となり、和氣堂に漲りて元氣旺盛、これぞ我が部の原動力であらう。十一時萬歳を三唱して散會した。

尙本年卒業の諸君は左の如し。

四段　塚本　太作　　四段　石渡泰三郎　　三段　古川　甚一　　二段　鈴木鐵太郎　　二段　作川信二郎

二段　永瀧松之輔　　二段　松尾恒四郎　　初段　五月女光三　　初段　峯岸　鎭治　　初段　村山　義一

初段　松野　和夫　　初段　水島　左造　　初段　小原善次郎　　初段　吉岡　修治　　一級　神吉　英三

一級　湯村　藤助　　一級　坂本　信吉　　二級　江口　重國　　三級　鍾田　政明　　三級　逸見　尙綱

四級　松田　光祐　　四級　中野　淵治　　四級　山岸市三郎

(四)　新入部員歡迎紅白勝負

新綠日に鮮かなる五月廿八日、綱町道場に於て新入部員の歡迎紅白勝負が行はれた。今春我が部は、多年後進の誘掖指

導に任じて、その功勞滅す可らざる塚本、石渡の兩四段以下拾餘名の有段者を、三田山上より送り出して、轉た寂莫の嘆に堪へなかつたが、新たに多數の有爲氣鋭の健兒を迎へたれば、元氣頓に加はり、新興の氣運場内に横溢するものがあつた。果せるかな當日戰士の雄々しき武者振りは、我が部の前途洋々たるものあるを示してゐた。

午前八時、戰ひは成年組、幼年組に分れて宣せられた。玆には成年組紅白勝負の中、最後の有段者の奮闘に關する部分の記事丈けを左に引用する。（白軍の有級者の大將を承はる柳澤は敵の五將近岡と引分け、紅軍の四將坂倉は白軍有段者の先頭土屋に喰ひ込んだのである。）

『戰は進んで、勝負益々佳境に入れり。兩軍之より陣形を正し、紅の坂倉、白の初段土屋と相戰ふ。土屋矮小なりと雖も業にかけては覺えあるもの、坂倉、伊藤、守谷の有級者諸將も跳腰にて打ち取りて、早川に向ふ。早川は引分二段を以て名ある荒武者、敵の疲れたるを見、その勝れたる腕の力を頼みて、土屋を押込めば、白の田代代つて出づ。田代は嘗て我が部に入となり、二年前故ありて去りしもの、今又此處に歸り來れるなり。卽ち技を示すは是れ報恩の道と、奮戰力闘荒れ狂ふ早川を大外刈に仆す。此に於て奮然として起てるは菅井（兄）なり。その獰猛は既に天下に響けるもの、忽に田代を屠り、好漢塚本と相對す。塚本は名だゝる巧者、虚々實々互に火花を散らして奮戰すること數合、勝負なか〳〵に見えざりしが、如何なる隙や見出しけん、塚本の烈しく打てる跳腰に菅井はドツと倒れぬ。續く山本味方の仇思ひ知れと、怒の眼光鋭く出で向ひ、彼れ跳腰に攻め立つれば、此も劣らじと跳腰にて攻め返す、離れては合ひ、合ふては離れ、懸命に秘術を盡せしが双方功なく、再戰を期して別る。新たに出でしは紅の菅井（弟）、白の牛久、何れも堂々たる體軀、天晴れ勇ましの武士なれば、その勝負如何にと見し間に、菅井焦りて攻め立てたれば、却て敵の術中に落入り、惜くも小内返しに討死を遂ぐ。强敵菅井を仆して功名あげし牛久も、精悍氣鋭なる闘の矢面には敵し難く、その背負に名を爲さしめたり。續く白の澤山は沈着剛毅の士なり、勝に勇める闘と渡り合ひ、互に秘術をつくして攻め戰ふも勝負決せずして終る。軍容

改まりて紅の小西、白の清水（邦）兩士は、共に千軍萬馬の間を馳駢せし老將軍、故ありて久しく戰闘の巷に出でざりしが若武者の健氣なる働きを見ては、逸る心の駒止め難く、こゝに親しく馬を陣頭に進めたるなり。兩者の策戰や如何ならんと見しまに、小西足の逆をとられて敢なき最後を遂ぐ。流石は老練なる白の腕の凄さ。次いで出でしは紅の二段副將清水（耕）、我が軍利あらずして、餘すは僅に一人なるに、敵には猶三人あり、いで力の限り奮ひ戰はんと、決死の色見えけるが、忽にしてその長大なる體軀を横へて白の清水を押込み、續く伊豫田と渡り合ふ。伊豫田奮闘能く努めたるも、武運や拙なかりけん、遂に内股に敗らる。紅漸く疲勞の色あり、時に奮然として現はれしは、白軍にその人ありと知られたる副將高橋、足の逆にて清水を討ち取り、紅の大將中野に當る。中野は是れ紅全軍の總司令官、興廢はかゝつて彼が雙肩にあり、堂々たる體軀、果敢の氣、精鋭の技、その雄名を天下に馳するや久し。されば高橋如何に元氣なりと雖も猶彼に敵し難く大外刈に討死しければ、愈々白軍の大將平岡馬を陣頭に進めぬ。平岡や精悍無比の士いま白軍を負うて起つ。兩軍鳴を靜めて此勝負如何にと手に汗を握り、一語を發するものなし、白多年の手練を現はすは此の秋なりと、奮然として敵軍に肉薄せば、紅の強引破綻の基となり、腕の逆をとられて遂に戰場の露と消えぬ、紅の無念や思ひやるべし。時に午後四時十分、乃ち飯塚師範起つて優勝旗を白軍に授與す。』

右紅白勝負終りて、飯塚師範の七人掛と、先輩石渡四段の五人掛とがあつた。七人掛は別に雜記中に入れたれば、玆には五人掛の壯觀を傳へることゝする。

石渡四段、いまは社會の人なれども、鬱勃たる元氣止め敢へず、起つて三田の現役精鋭を引き受く。その雄々しき挑戰に應じたるは、平岡、清水、伊豫田、牛久、土屋の面々、何れも血氣溢るゝばかりの勇者であつた。

武士の禮儀正しく、中野審判官開戰を宣すれば、双方一揖の後土屋先鋒を承はる。對手は名に負ふ四段、敵はぬまでも奮戰を續けばやと立つまもあらず、忽ち腰投に投げ飛ばさる。次に進みしは牛久、勢よく突撃したれども、大外刈釣込足

の合業に之も息絶ゆ。續く伊豫田も亦戰場の露と消え、清水代りて勇猛突進息をもつかずに攻め立てたるが、遂に押込まれて愈々御大平岡起つ。石渡四段、既に幾多の苦戰に疲勞の色見えければ、平岡はこゝぞと勢込んで攻めたて、兩虎の戰を演ぜしが、平岡の打てる體落見事に極まりて敵の首級をあげた。

勝負終つて晩餐の宴あり、少憩の後歡迎會に移る。中野幹事起つて開會の辭を述べ、柔道部の歷史より說き起して將來の抱負に及び、新入部員に諭すに慈愛に富める溫言を以てした。次に飯塚師範の一場の訓話ありて式は終り、それより部員の劍舞、筑前琵琶、ヴアイオリン、茶番等の餘興に歡をつくし、柔道部萬歲を名殘りに散會せるは、夜色深く三田の山を鎖せる九時の頃であつた。當日の勝負左の如し。

（紅）　（白）

大木 — 三橋
一井 — 山田
溝上 — 星山
中村 — 三木
倉田（三人目中止） — 上田
大西 — 田中
倉田（再出） — 日東寺
高田 — 田島
高木 — 濱谷
佐藤 — 堀

石橋 — 小島
青山 — 谷
後藤 — 長野
吉武 — 岡村
高須 — 笹島
井上 — 栗原
伏見 — 吉平
臼井 — 足立
土屋 — 丸山
松山 — 酒井
井上（松） — 佃
増田

秋岡 — 市川（金）
長谷川 — 白井
藤平 — 市川（喜）
野本 — 安藤
宮島 — 古山
高橋 — 白山
柴田

馬屋原

國司　櫻木　水島　古賀　後藤　北村　西川　永井　高木　永井　工藤　齋藤　山崎
占部　珍田　長谷川　正部家　德弘　本間　山本　堀江　松浦　大澤原　西山　山口　宮本　田中
田中　桑原　金子　吉澤　神谷　沈　齋藤　豊島　白方　青野　二谷　後藤　三枝　高橋　和泉
鈴木　伊澤　川口　高梨　和田　甲斐　鷲尾　橘本　杉山　渡邊　玉井　御園生　水町　幸田　上原　長塚
高橋　久留島　稻葉　市川　島　池野　坂倉　近岡　伊藤　早川　菅井（虎）　山本　菅井（國）　闘　小西　副將二段　清水（耕）　大將四段　中野
幸島　山本　下川　富松　柳澤　土屋　初段　田代　塚本　牛久　澤山　清水（邦）　伊豫田　副將二段　高橋　大將三段　平岡

（五人掛）

四段　石渡泰三郎　○○○○●

- 初段　土屋義雄
- 初段　牛久孝四郎
- 初段　伊豫田三郎
- 二段　清水耕作
- ○三段　平岡義夫

（五）第二十一回大會

秋氣漸く闌ならんとする十月二十九日、第二十一回柔道大會が催された。二百の部員、日頃錬磨の腕なみ現はすは此の秋と、戰開かれざるに健兒の意氣既に昂れるぞ勇ましき。

午前八時といふに、早や成年組紅白勝負は開戰された。兩軍各々四十二名、紅軍は設樂哲夫を大將に、藤浪達美、堀江龍之輔、齋藤義臣の面々之に次ぎ、白軍は大將の三代川陸質郎に、田中誠三、鹽澤廉助、山口達也の精鋭つき從ひ、威風堂々場を壓してゐた。白軍の巨漢山品了獅子奮迅の勇を鼓して六名を撫で斬りにすれば、紅軍にも佐々木善次郎、五月女松二郎の勇士ありて、各々三人を薙ぎ仆す。戰進んで白の松浦新平、敵の三人を投げ飛ばして四人目に引分くれば、紅軍の齋藤義臣も亦同じ數丈け切りまくつて味方の仇を報ず。次で愈々三將同志の接戰となり、紅の堀江は白の鹽澤に敗れ、鹽澤は紅の副將藤浪と引分く。玆に於て紅軍の大將設樂馬を陣頭に進め、敵の副將田中（誠）と渡り合ふ。互に力戰奮闘せしも、紅將武運拙なく、遂に田中に押へ込まれて白軍の勝となる。

次に戰は、普通部對商工部の紅白勝負に移つた。（紅）普通部は市川を大將として上原之に次ぎ、（白）商工軍は大將下川

の下に小野が副將であつた。白將下川能く健闘、四人までも投げ倒して味方の頽勢を一擧に挽回したのは目覺しかつたが、紅將遂に不參の爲め、榮冠は白の占むる所となり、商工部としては昨年の雪辱戰であつた。

（普通部）

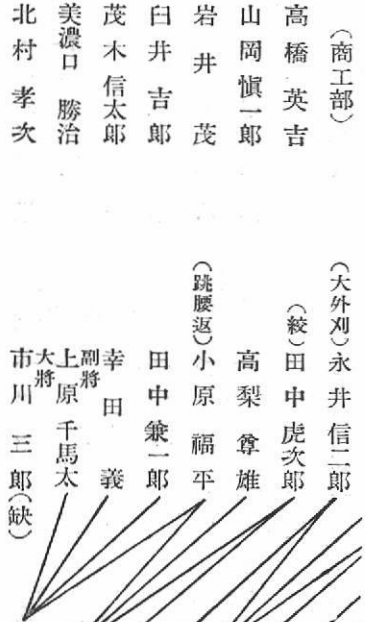
（押込）岩崎清一郎
森久則
（押込）大隅登山
（押込跳腰）長谷川三郎
（足拂）曾谷泰學
（跳腰）國司經夫
小口清美

（商工部）

高橋英吉
山岡愼一郎
岩井茂
臼井吉郎
茂木信太郎
美濃口勝治
北村孝次

（大外刈）永井信二郎
（絞）田中虎次郎
高梨尊雄
（跳腰返）小原福平
田中兼一郎
幸田義
副將 上原千馬太
大將 市川三郎（缺）

堀口藤平（押込）
高木音次
吉田政助
山本忠清（跳腰同）
和田義隆
白方梅吉
副將 小野壯一郎（跳腰、絞）
大將 下川健太郎（釣込足、背負投、足拂、大外返）



午後外來各校選手と部員有級者の間に、四十組の三本勝負あり、それより柔、投、固、極、五の形等を行ひ、後有段者の勝負を以て盛大なりし本大會を了つた。

三本勝負

（有級者）

（一）（日）服村誠誘
○○佃稀世志

（二）（日）篠田
○○古賀菊治

（三）○（日）塚崎行現
浦邊景造

（四）（高輪）龍口善海
○○豊島山人

○(高輪)(五)　鈴木勇藏　水島竹雄
○(講)(六)×○　後藤孝　吉武一雄
○(水)(七)　重田瑞穗　本間保次郎
(近)(八)○　白濱近雄　吉澤憲治
○(近)(九)　齊田仙太郎　森春松
(青師)(一〇)○○　河村東平　正部家種良
(近)(一一)○○　光長忠喜　渡邊健藏
(青師)(一二)×　植松豊馬　桑原正憲
(美)(一三)×　專頭憲太郎　杉山豊弘

(水)(一四)×　松尾我何人　山崎三郎
(高工)(一五)×　日野義一　田中恕一
○(附)(一六)　笠尾次郎　高梨尊雄
(高商)(一七)○　近藤重治　後藤幹夫
○(附)(一八)×○　伊藤文雄　後藤豊吉
(東洋)(一九)×　清野新一　三代川陸質郎
(美)(二〇)○○　大山逸八　高橋貞作
○(講)(二一)　渡左近　田中兼一郎
○(外)(二二)○○　臼田集助　幸田義

○(錦)(二三)×○　石黑成晴　上原千馬太
○○(工)(二四)　村田泰　橋本廉平
(日大)(二五)○○　井上　高橋篤
○(日大)(二六)　柳澤　尾上繁二
(錦)(二七)○　富田樂　稻葉茂
○(錦)(二八)　千葉胤二　南野次郎
(日)(二九)×　三井龍堯　須藤政秀
(外)(三〇)×　森田良三　小野壯一郎
(講)(三一)○○　明石國助　幸島正路

(高工)(三二)×　田島武長　島泰次郎
(高農)(三三)×　坂田進　海東要造
(獨)(三四)○　栗本邦雄　近岡源三
(東洋)(三五)×　城島庸雄　下川健太郎
(早大)(三六)×　川崎憲太郎　富松覺
○○(講)(三七)　篠原孝義　坂倉德重
(早大)(三八)○○　中野　藤平眞
(錦)(三九)×　日比谷　岩崎尚武
(高工)(四〇)×　江橋潔　柳澤德治

○(附)
(四一) 駒井 ― 長塚芳太郎

形

柔之形
初段 牛久孝四郎
二段 伊豫田三郎

固之形
二段 關義雄
二段 飯塚茂

五之形
四段 中野榮三郎
二段 高橋順之助

投之形
二段 清水耕作
二段 高橋順之助

極之形
三段 平岡義夫
初段 菅井國之助

(有段者)

初段

(一) (水) 小河範太郎 × 早川重雄
(二) (水) 小河範太郎 × 池野梅三
(三) (高師) 鵜澤孝 × 守谷正毅

(四) ○(日) 金澤誠愿(背負) ― 岡安寛司
(五) (講) 關口亙 × 土屋義雄
(六) ○○(講) 石田信三(小外刈 釣込足) ― 德永秀夫

(七) (講) 大谷武一 ― ○ 牛久孝四郎(大外刈)
(八) (講) 矢部正作 ― ○ 菅井虎之助(大外刈)
(九) (明大) 渡邊 ― ○○ 塚本福治郎(足拂二)

（講）小室
（一〇）○菅井國之助（大外刈）
（講）大塚伊吉
（一一）○○中島廸吉（押込跳腰）

（明）上原岨介
（一二）×○中村壯吉（押込）
（明）難波清人
（一三）×小西哲二

（高師）福田廉三
（一四）×ウヰルド
（講）長瀬靖
（一五）×澤山福彌太

二段

○（早大）久米榮輝（押込）
（一六）×○飯塚茂（逆）
（深）辻徳夫
（一七）×闘義雄

○（早大）森永成（跳腰）
（一八）×○伊豫田三郎（合業）
○（中央）浦井繁（跳腰）
（一九）清水耕作

○（講）佐藤寛吾（背負）
（二〇）高橋順之助

三段

（中央）丹波貫三
（二一）×平岡義夫

（六）雜記

飯塚師範の七人掛と其怪力

五月二十八日に行はれた新入部員歡迎紅白勝負は、白組の大將で道場第一の元氣者三段平岡氏が、紅組の大將四段中野

氏を美事に破つて目出度く終りを告げたが、之に續いて講道館にも見られぬ程の壯快な勝負が開かれた。それは他なし、師範飯塚六段の本塾の元氣者相手の七人掛である。先づ勝負の狀況を記するに先だち、此等勇者の芳名を擧ぐれば左の如し。(石渡四段は飛入)

六段　飯塚師範　○○○○○

- 初段　菅井(國)
- 初段　牛久
- 初段　伊豫田
- 二段　清水
- 二段　高橋
- 三段　平岡
- 四段　石渡

審判者は四段湯本芳三郎氏、開始前に次の如く宣告した。卽ち個人間の引分時間を初段は十分、二段は十五分、三四段は二十分とすること。

飯塚師範は身長五尺一寸體量十五貫五百の小軀を道場の中央に運んだ。劈頭此の強敵に深き痛手を負はせ呉れんものと打向ひたるは、佐原の產菅井氏である。氏は得意の左大外刈を以て、息をもつかず攻め立つれども、師範は一寸の身動きもせず、恰も大波小波折重つて巖を碎き去らんとあせり狂ふにも似た形であつた。頓て力盡きたる所を難なく押へられて一本。次に我こそはと飛び出せしは、身の丈五尺七寸餘の強の者牛久氏である。之れ亦輕く操縱はれて退けば、師範何者ぞ、六段何者ぞと、狂氣の如く荒れ廻りし備後三郎ならぬ伊豫田氏、終に橫捨身を以て道場の一方に投げ飛ばさる。次は道場一の大男、鬼とも組まん氣鋭の二段清水氏なり、面に笑を含んで出で向ふ。苦戰に苦戰を重ねたる後、僅四分にして

同じ刀の露と消えた。是れによるも、柔道は唯腕力のみにあらざる事を知るに足るであらう。既に四人をば物の美事に止めを刺したるにも拘らず、師範は何等勞れたる樣子も見えざるぞ不思議なる。悠々として迫らず、命惜からざるものは出で來れと身構えする樣、堀部安兵衛が高田馬場の原頭に、伯父の讐を討ちし事ども思出されて、血も湧き肉も躍らんばかりである。斯かる處へ當時得意の頂上にある二段高橋氏、我こそはと出でて引組み、一意に守勢を取りて動かず、八分九分十分と時計は進めども、高橋氏の命猶存するもの丶如し。時に湯本審判の口より、あと五分で引分と、森嚴なる注意が下された。觀者此の勝負如何にと、一擧手一投足をも見落すまじと、片唾を呑んで見守れば、場内唯聞ゆるは高橋の烈しき呼吸のみ。暫ありて師範の左足上るよと見るまに、二段の高橋氏は參つたと云ふ一言を名殘として、道場の中央に投げ附けられたるぞ是非もなし。猶平岡石渡の兩氏あり、武者振ひして待ちかまへたる所なれば、早速引組まんとせるも、既に高橋氏に規定の時間を要したれば引分くる可しと、師範より審判者に申出であり、此處に壯烈なる勝負は、平岡石渡の兩氏を殘して、門生側の勝となつた。さるにても飯塚先生の年と共に元氣の盛んなること驚嘆に堪へざる所である。（老人生）

尙飯塚先生は、平生片端より有段者と稽古して、些も疲勞を覺えざるを常とし、精力の絶倫なること稀に見る所であるが、又其腕力の強大なることも驚くべく、この頃身長五尺八寸體量十九貫の清水二段を片腕にて指し上げ、道場を三周して一同に舌を卷かしめたこともあつたといふ。

柔道部々報の發行

柔道部より雜誌を發刊して、之を部員及び先輩の間に配布せんとする計畫は、多年の宿題であつたが、本年に入りて其機運漸く熟し、五月五日有段者會の席上に於て之が決議をなし、清水、高橋、山本の三氏先づ調査委員に擧げられた。

次で五月十日、中村氏邸に於て相談會を開き、席上調査委員の報告あり、大體左の如き豫定の下に、愈々雜誌『柔道部々報』を發行することゝなつた。

一、發行度數を年三回、卽ち每學期一回とす。

一、每號の紙數を五十頁內外とし、部數を二百部とす。但し部員中より百五十名、先輩より五十名の會員を募る。

一、之に要する費用は、東洋印刷株式會社の見積書に依れば、貳拾七圓七拾五錢にして、之に雜費貳圓貳拾五錢を加へ合計金參拾圓なり。之に對して柔道部特別資金中より、維持費として金貳百圓を支出し、每號の費用は、會員より拾五錢の會費を徵收して之に充つることゝす。

尙各方面の事務を擔當する爲、左の係を設く。

一、編輯長　一名（幹事之を掌る）

一、編輯係　五名

一、廣告係　二名

一、會計及庶務係　六名

斯くして部報第一號は、七月七日に發行せられ、爾來號を重ぬること十數回、每號殆ど百頁以上、論文あり、文藝あり、通信あり、記錄雜報あり、頗る重寶なものであつたが、大正七年四月發行の第十三號を最後として廢刊するに至つた。

師範邸の淸遊

飯塚師範の有段者及び一級者招待會は、十月二日午前十一時より開かれた。會の名を淸遊會と云ひ、一日の淸遊を恣にするのが此會の目的である。會場は三光町三光坂の上師範の宅、十五疊の廣間を休憩所に充て、栗、柿、パン、餅菓子等

の御馳走が、山の様に積み上げられてゐる。師範は羽織袴に威容を正して來客を待ち、數名の寮員來客接待の任にあたる。頓て十時を少し過ぐる頃、先頭第一に高橋二段がやつて來る、之に續くは守谷初段、十一時を打つたる頃より、伊豫田、飯塚、關の各二段を始めとして、相會するもの卅四士、物好きに段數を調べて見たら正に三十九段、大抵の梯子段よりは確かに高い。さしもの菓子の山も、此豪傑連の前には物の數かは、忽ちの間に平げられ、やがて食堂の幕となる。食堂は青葉茂れる庭園中に設けられたる立食場、三光名物栗の御飯に薩摩汁、喰ふは喰ふは一斗の飯も瞬たく間、中でも菅井初段の十八杯、清水二段の十七杯、平岡三段の十五杯、尾上一級の十三杯等は出色の方で、中野塚本兩四段の五杯が最小量、稽古でも飯の喰ひ方でも、近頃の若い者には敵はないとこぼす。最後迄奮闘したのが守谷初段、然しビツチが遲いので、杯數はたつた十杯だと云うて居たが、眞か僞か。

食事がすむと、暫し休息して一時半より角力にかゝる。土俵は近所の空地に作られ、出場者三十一人、何れ劣らぬ好力士、誰とて大關を以て自任せざるものはないが、便宜上之を東西に分けて番組を編成した。先づ稽古角力が始まる。入れ代り立ち代り立ち合ふ樣、勇ましなんど云ふばかりなき程の賑ひ、皆身體の立派な事は云ふ迄もないが、中でも牛久、清水、中村、小西等の諸氏は、力士にして見たい樣な體格。其中に取組に入る、晴天五日間興行するのだといふ。何れも勇壯な勝負許りであつた。こんな面白い角力は、本場所でも見られないと、見物に來て居た一好角家は賞贊してゐた。

足絨の廢止

從來闘節業の中、手首、足首、及び首挫業は、形或は稽古に於て練習することあれども、勝負試合に於ては往々危險あり、之が爲め講道館は此等の固業を留手として、勝負に採用せず、若し之を行ふものあれば、中止を命ずることにしてゐた。彼の武德會は、各流の集合する處とて、中には此等の業を唯一の武器とするものもあつたが、遂に世論に服し、審判

規定の中にも、之を採用せずと發表することになつた。

扨て足絨業は、本年十月十五日の講道館紅白勝負迄は、有効の關節業として盛に錬磨されたものであるが、連年の勝負に於て其成績良好ならず、而も之に因る負傷は經過頗る不良であつて、爲に稽古者の進境を害することもある。それで講道館では今回種々研究の結果、之を參考業とし、實地の業にあらずとして廢止するに至つた。此の業に熟練し、之を特技とする人の爲めには、多少氣の毒の感あれども、柔道の進歩發達の上より觀て忍ぶ可きことである。

遠足會

十一月十一日秋季遠足會を催し、同志五十五名妙義山に向つた。當日山麓の町に一泊し、翌日妙義の景勝を探り、午後十時歸着した。

講道館に於ける部員の奮闘

二月より十一月まで、東京府師範、帝大、一高、高工、高商、水産講習所、講道館、高等農學校、附屬中學、高等師範、日蓮宗大學、獨逸協會中學、錦城中學、高輪中學、早大、東洋協會、外國語學校、美術學校等、頗る多數に上る各所の大會に、夫れ〴〵部員を派遣して、我が部の勢威を示したが、その中講道館の春季と秋季に行はれた紅白勝負に於ける、有段者部員の奮闘振りをこゝに掲げよう。

○五月二十一日午前八時から講道館で開催された春季紅白勝負に於て、出席者は無段者百五十名有段者百三十名であつて、皆都下の剛の者の集まりであるから、觀覽者は其壯烈なるに思はず手に汗を握るといふ有樣、之に出戰したる我が部の選手の働はどうであつたか。

初段德永秀夫君、敵の一級大將青木某と血戰せしが、猛將德永もこの日氣勝れず、恨を呑んで敢なく幕下と引分。

土屋義雄君、一人を倒し二人目に引分けたるは元氣であつた。

岡安寬司君、一人を手玉に取り、二人目に引分けて大元氣。

ウキード君、一人を跳ぬ、二人目に引分。

中村壯吉君、名譽の戰死。

菅井虎之助君、元氣當る可らざるものありしが、敵の佐藤よく防ぎて引分。

山本忍己君、永井卯平次の一本背負で見事に投げらる。秋の奮闘を待てと退く。

菅井國之助君、城南の斯界で、强の者と響かして居る氏である。今日は是非共五六人撫で斬りにせんと意氣込んでゐたが、早大の森永敵ながらも天晴れの勇士、國之助君押へられて、口惜しきこと限なし。

塚本福治郎君、菅井の仇を立所に打つて、次の者いざ來い來れと待構えたが、古川與孝に背負で投げられたるは無念。

伊豫田三郎君、古川與孝を一擊の下に打据ゑんとせしも、彼も必死の奮戰、終に引分。

關義雄君、釣込腰で一人を投げ棄て、二人目に敗。

牛久孝四郎君、二三人は朝飯前ならんと、片唾を呑んで見詰めたが、氏の運拙なくして橋本の大外刈に倒る。

飯塚茂君、已れ橋本、戰友の仇思ひ知れと、此の意氣や焦りけん、思はず大外刈で返り打。

金子忠之助君、二段の重鎭大串爲八氏と力戰引分。

二段淸水耕作君、高島を右大外刈に、山內澤太を釣込足に倒し、米山と引分となる。

高橋順之助君、小軀よく戰ふと名ある羽石幸之助氏と數合の戰、勝負決せず終に引分。

谷村治吉君、新兎を背負にかけて、草場の跳腰に倒る。

三段平岡義夫君、紅軍の副將たり、敵の副將吉浦を小氣味好き程支釣込足にて投げ飛ばし、敵の大將坂井大輔と暫し奮戰せしが、跳腰の爲に戰死。

因に、此の日の勝負中吾人の血を湧かしめたるは、大將同志の勝負にして、兩將能く戰ひ能く防ぎ、何れ劣らぬ勇將なりしが、江川鋭く坂井の右足逆に入り、終に勝は紅軍の手に落ちた。

○又十月十五日の秋季紅白勝負に於ける出席者は、段外一級百六十八名、初段百三名、二段十名、合計三百餘名と云ふ多數であつた。當日塾方勇士の活動振は實に立派なもので、一段と綱町道場の名聲を高からしむるものがあつた。

一級早川重雄君、初段圓子經雄氏と取組むや、君獨特の足拂で之を倒し、次に來れる井出欽哉氏をも横捨身で參らせ、池野梅三氏と顔を合すことゝなつた。塾の初段には流石の君も一歩を譲つた。此の日の昇段者二人の中の一人となつたのは、平素の勉强が現はれたといふべきである。

初段池野梅三君、此の日君は足部を負傷して居たので、何時もの様な好結果を得ることが出來なかつた。早川を跳腰で飛ばし、西部と引分。

ウキード君、君の取り口は實に立派になつた。技も初段になつてからぐつと進んだ。初段の押へ役山口良雄氏と引分を取つた所など、有數な働きであつた。

守谷正毅君、初段の初陣に石田信三氏の爲に跳巻で倒れたが、君の勝負法は實に要領を得て居た。

土屋義雄君、君は今日の勝負で其の技倆の八分通りを發揮することが出來た。最初に柳澤仙藏氏を跳腰で戰場の露と消えさせ、長谷川清氏をも釣込足で一本半といふ程見事に倒し、次の鈴木龜治郎氏と惡戰苦闘を續けて引分。

岡安寛司君、塾の有段者中で一番小さい體軀の持主だらう。古武士の風ある丈あつて中々確りしたものだ。一人を小内刈で倒して、次の者に敗れたるは殘念。

小西哲二君、井上知京氏と戰ふこと稍暫し、御得意の押込も今日は効を奏せず、却て君の得意の大外刈で倒された。

清水邦雄君、元老清水君、あだ名を杢兵衛、杢さんの一語は君の性質をよく發揮してゐる。最後の紅白勝負に出席する元氣や愛す可し、引分に了る。

中村壯吉君、村井榮藏氏を連發の大内刈で攻撃し、合せて一本取つた。次に來た強敵佐藤運吉氏の跳腰に倒る。

曾木清君、君も佐藤運吉氏の爲に敗れた一人。

德永秀夫君、君の跳腰今日は利いた。西宮伊三郎氏を跳腰の合せで倒し、續いて來る上原岨介、池田茂雄兩氏をも同じ技で退かしめ、大津武敏氏の右腰に倒れた。

菅井虎之助君、君の無鐵砲な足拂は大津武敏氏を退かしめ、今泉清氏と引き分けた。

中島廸吉君、相手の矢部氏は講道館に於ても有數の武士、火花を散らして戰ふこと數合、中島の思ひ切つたる背負投に軍扇が上つた。馬場氏代つて攻めかゝる。中島背負に跳腰に此處を先途と戰つたが、却て敵に乘ぜられて左大外刈に退く。

塚本福治郎君、戰友の仇思ひ知れと、君が打ち出したる跳腰に、馬場氏もんどり打つて退けば、鵜澤孝氏代つて出づ。之れも君の鋭き鋒先受けきれずして、戰友の後を追ふ。次の吉尾氏は元氣の士、勢ひ込んだる大外を打ち返されて塚本君勝を敵に讓る。

山本忍己君、いでや塚本が仇打たんと連發の左跳腰に攻め立てしが、敵もさるもの之をば輕く受け流す。山本焦りに躁りしを、敵の打ち出したる膝車に分を取られ、二の矢に勝を敵に讓りしは、遺憾の極みであつた。

澤山福彌太君、吉尾氏如何に強くとも、爭で我が太刀風受け得べきと、横掛の早業に之を破る。續く森氏も何のその、跳腰に來るを裏に取つて投げ、吉原氏にと打ち向ふ。吉原氏は京都より登り來れる强の者、澤山君の疲れに乘じたる支釣込足功を奏す。

牛久孝四郎君、澤山の仇思ひ知れと勇み出でしが、敵の計畫圖に當りて、あはれ襟絞め業に返り討ちとなる。

菅井國之助君、よくも戰友を二人迄討ち取りしよな、我こそは慶應一の元氣者、我技の切れ味受け止めて見よと、岩をも碎かん大外刈に、吉原氏は微塵となつて消え去れば、關口某打ち向ひ、砦を固めて戰はず、菅井の强襲幾度か敵陣を突破せんず勢なりしが、時間來りて惜くも引分となる。

飯塚茂君、勝に誇りたる田口氏を唯一打ちに打ち据ゑて、續く關口氏も物の數かは、忽ちの中に打ち破りて、長驅佐藤氏を襲ひしが、時に利あらず敵の背負に名を成さしめた。

伊豫田三郎君、我が友の敵よと佐藤氏をば手玉に取り、中元寺も何のそのと立ち向ひしが、敵もさるもの、輕く之を受け止めて釣込足に勝を制す。

關義雄君、中元寺氏如何に强くとも、未だ初段の木葉武士よと、釣込腰にて之を破り、續く大野氏をも返り討ちと、勢込んで攻め立てしが、敵も名だゝる武士なれば、慌てず騒がず押込に出でたるぞ雄々しかりける。

清水耕作君、高島義直氏を唯一揉みに揉み潰さんと、心は矢竹に逸れども、敵は恐れて戰はず、流石の君も技を施すに術もなく、時間來りて引分となる。

高橋順之助君、國末の如き何程の事やあると、逃げんとするを引き捕へて首掻き切れば、白石亘氏よき敵こそと打ち向ふ。激戰數合、勝負何れとも見えざりしが、白石の飛鳥の如き腕挫に、高橋無念の敗を取る。

谷村治吉君、鋭く突き進みて、白石を難なく取つて投げ、兒玉氏迄もと攻めつけしが、彼の力や優りけん、終に恨の涙に袖を絞つた。

進級一括

○二月五日講道館鏡開式に於て昇段したる者左の如し

初段へ　村山義一、松野和夫、菅井虎之助、塚本福治郎、徳永秀夫、土屋義雄、岡安寛司

二段へ　松尾恒四郎、永瀧松之輔

○二月五日月次勝負の結果

幼年二級へ　幸田義

幼年一級へ　幸島正路、市川三郎、尾上繁二、島泰次郎、松崎實

二級へ　久留島健三郎、後藤豊吉、御園生譲、高橋篤、設楽哲夫

一級へ　山本誠一、須藤政秀

○二月十九日紅白勝負の結果

二級へ　和泉桂之輔、三枝孝二

一級へ　小野莊一郎

○五月二十八日の紅白勝負の際

二級へ　二谷丑之助、田中兼一郎

○六月十七日月次勝負に於て

二級へ　高橋貞作、橋本廉平、後藤幹夫

一級へ　稲葉茂、長塚芳太郎

○八月十三日講道館昇段式に於て

初段へ　守谷正毅、池野梅三

二段へ　金子忠之助、伊豫田三郎、關義雄、飯塚茂

○十月七日月次勝負の結果

二級へ　甲斐義智、白方梅吉

一級へ　高橋篤

○十月十五日講道館勝負に於て

初段へ　早川重雄

○十二月十日講道館昇段式に於て

二段へ　塚本福治郎、澤山福彌太、菅井國之助、山本忍己

（七）休暇中の稽古

本年の夏期及び冬期休暇中、我が部員の稽古勵精に關して物せられた二篇がある。一は土屋生の筆に成れる講道館に於ける暑中の稽古であつて、他は遠馬生の描いた綱町道場に於ける越年の寒稽古である。共に當時の光景を叙して興味津々たるものあり、茲に採錄して讀者の參考に供することゝした。

講道館の暑中稽古

『本年の講道館に於ける暑中稽古は、七月十五日より八月十四日までの三十一日間、最後の一日は途中一日休んだ者の爲に設けられたのである。

『初日に於て今更ながら肝銘せる事と、喜ばしき事との二つがあつた。一つは嘉納師範の暑中稽古をなすにつきての訓話で、他の一つは我が柔道部員たる飯塚、關、金子、伊豫田四君の、昇段して二段となられたる事であつた。

『最初の二日の景氣と來たら非常なもので、宮本三段の統率する愛知中學校の數十名を筆頭として、全國各地方より態々暑中稽古に上京した人々も多く見受けられ、有段者無段者を合したならば、優に其數四百を超えたであらう。何ぞ夫れ盛大なるや、日本國將來の爲に大に賀すべき現象である。然し慨嘆に堪えぬは、三十一日間の中に一人減り二人減りして、八月十四日の暑中稽古終了日に於て、暑中稽古皆出席證書を授與せられたるものが、其二分の一位に減じた事である。人間が一度思ひ立ちて、或一事を成就貫徹せんとするに當りては、中途如何なる困難に際會しても、決して挫折する事なくよく百難を排し之れに打ち勝つてこそ、男子の眞面目が遺憾なく發揮せられたといふべきであらう。暑中稽古皆出席を小事と看做す事勿れ、大事を成就するの士は、能く小事を成就する者にして、始めて成し能ふものである。かくて余は、暑中稽古に皆出席したのは二度丈けであるが、其効果は余の精神にも及び、事を中途にして放棄せぬといふ覺悟を有せしむるに至つた。

『我が部員にして皆出席せしものは、本年我が部を去られたる初段の吉岡君、二段の金子君、余及び甲組の福岡君、幼年組三級の和田君等にして、甚だ數が少なかつた。尤も暑中稽古は、恰も學校の暑中休暇なれば、家庭の人となるゝを樂みに歸省せらるゝ諸君が多き爲め、致方がない。時々出席せられしは、先生及び初段牛久、ウキード、岡安の三君等であつた。

『他の帝大、早大、高商、高師等よりも各々數人の出席者があつた。

『一體に本年の暑中稽古は、出席者の多數なりしに拘らず、概して元氣に乏しかつた樣に見受けられた。其原因の那邊にありしやは余の知り得る範圍ではない。されど有段者側が無段者側に比して、元氣多少盛なりしは、有段者勝負を目前に

控えて、野心勃々たる連中もあつたからであらう。

『講道館で稽古すると上達が早いといふ事を時々耳にするが、夫は結局多數の人が毎日出席して、其出席者が各自異なれる技、即ち得意の技を有する人々と技を爭ふを以て、こゝに研究心も起り、技も亦上達するに至るのであらう。されば、要は多くの人にぶつゝかり、以て種々研究するにあるのである。暑中稽古は、一には暑氣に打ち勝つと共に、他方に於ては實に此の要求に最も能く適應せるものといふべきであらう。

『かゝる所信を以て、或は高段の先輩者の教を受け、或は多數の有級無級者と奮闘して、一日は一日と過ぎ去つた。

『七月も漸く末になつて、大分出席者は減じたが、殘る面々は皆斯道の熱心家の揃ひの事とて、反つて稽古に張合がついて、道場は破るゝばかりの賑ひを呈して來たのも偶然ではあるまい。

『七月三十一日より三日間、吾等柔道研鑽の途にあるものゝ、最も謹聽せんと欲した所の有益なる講話及び技の說明等が横山指南役、佐村五段、三船五段によりて日々なされた。

『三十一日には横山指南役の、凡そ諸藝を修得するに當つては、玄人藝の修業法と、素人藝の修業法との二方法があるとて、圍碁の場合を例として引用せられ、諸子は宜しく玄人藝の修業法、即ち一度道場に出席した以上は、一刻も無駄に過す事なく、出來得る限り多くの先輩者につき、總ての技を研究修得するの方法を採り、能く其目的に背かざる樣、諸子の努力を希望するとの講話があつた。

『八月一日の佐村五段の講話の大要は、身神を鍛錬して、臨機應變の處置を採るに際し、能く違算なからしめん事を期すると同時に、如何に技は上達するも之を惡用する事なく、他人をして己の身邊の威風に屈せしめ、自然に其惡計を用ゆるの際なからしめん樣に、諸子の奮勵せられん事を望むと述べ、夫れより投の形を實際に就きて說明せられた。

『二日には三船五段が、自身の經驗を根本として、固の形を是れ亦實際に就きて說明された。

『六日には愈々有段者勝負があつた、初段二段合して百人位の出席者があつたらう。日頃鍛えに錬えた腕前を見するは此の秋ぞと、各人の奮戰力闘見るからに肉躍り骨鳴るの概があつた。流石暑中稽古中の勝負丈けあると首肯せしめた勝負も仲々に多く見受けられた。

『十日に至つて夜來の雨は遂に大暴風雨と變じた。夙起霽れたる空を見上げて居る時に、耳に聞ゆるは、唯騒然たる物音である。驚く人々の語るを聞けば、小石川柳町邊は出水腰間を没する個所ありとのことである。さては昨年の二の舞かと思はず慄然たる事しばし。

『午後一時頃例の如く稽古着を引擔ぎ、急ぎ講道館に至らんものと春日町に出づれば、滿々たる一面の濁水、見るから凄惨たるものであつた。講道館も矢張り四面皆敵にあらずして、之は又濁れる水である。門の掲示を見れば、暑中稽古は開運坂の道場に於てなす旨記してある。何しろ開運坂の道場は、大塚の火藥庫のまだ先で隨分遠方だし、後四日間、電車はあるけれども、此の暑氣ではと一時は躊躇もしたが、イヤイヤ今中止しては、百日の説法屁一つで、今迄の苦心が水泡に歸する譯と、勇氣一倍、四日間遂に開運坂道場に出かけて、やつと三十日間の暑中稽古に皆出席をする事を得たのである。過ぎ去つて見れば何んでもないものである。萬事世間の事は皆斯くの如きものであらう。十三日に暑中稽古終了式があつて嘉納師範の暑中稽古を終了するに當りての訓辭があつた。

『十四日には、暑中稽古皆出席證書の授與式があつて、今年の暑中稽古は玆に目出度終りを告げた譯だ。

『池野、守谷二君の初段となられた事は、お互に賀すべき事である。

『暑中稽古三十日間、永しといふ事勿れ、天地の悠久に比すれば、何ぞ夫れ短なるや。

『暑中稽古三十日間暑しといふ事勿れ、赤道直下の極熱に比すれば、何ぞ夫れ溫暖なるや。

『酷暑家居して徒に暑さに苦しむの子は、宜しく行いて道場に汗を絞り、然る後冷水浴後の快を取れ。

『是れ千金の子の味ふ能はざる所、余は我が部員にして夏時在京無聊を喞つの時は、宜しく往いて暑中稽古に其神身を鍛錬し、忍耐力を養成せられん事を望むや切なるものである。』(土屋生)

冬期休暇中の稽古

『此の冬休中、多くの學生が歸省して親しき兩親の膝下に於て晏衣して居る其間、部員の有志は綱町道場に於て日々心身の練磨をなしたのである。最初は稽古に來る人數も多かつたが、追々と歸省して終には二十名内外となつた。隔日位には師範も出席された。主なる出席者は、澤山、塚本の二段を始めとして、初段では守谷、池野、柳澤の諸君、有級者では幸島、和田、水島、桑原、高木、森、齋藤、豊島、土井、藤原等の諸君であつた。これ等の連中で五人掛七人掛などをやつたりした。

『十時から十二時迄の稽古、晝とは云ひ乍ら冬の眞最中である。午前四時からの寒稽古と餘り變りは無い様に思はれたが熱心家のみの集合であるから、少し位の寒さには退けを取らなかつた。中には一里も遠くから通つて來る人も有つた。又或は歸省仕様と思つてゐたが稽古が面白くなつて、歸國するのを見合せたと云ふ人もあつた位、以て如何に熱心家のみで且つ愉快であつたかゞ想像されるのである。斯くの如く熱心家揃ひであるから、大晦日も休まず、元旦は早朝から稽古仕様と云ふ意氣込で居たので有つたが、道場のお婆さんが、大晦日から正月の三ケ日の間は、塵も掃き出し度く無いから、どうか稽古を休んで貰ひたいと云ふので、此の間は骨休めを爲す事に定めた。其時も兵學校の生徒が稽古に來て居たが、これが恐しく熱心で、この三ケ日の間も、何所かで稽古は出來ないかと聞いた程である。

『かくて明治四十五年の元旦となるや、寄宿舍の居殘り連中を始めとして、在京中の部員は、師範の家へ年頭の禮に出掛て行つた。所が師範はすてきな元氣で、今の若い者は飲む方も弱ければ、食ふ方も弱い、誠に意氣地が無いと云はれたの

で、推參の面々大いに憤慨し、飲む方は塚本四段が引受けたので、食ふ方に於て辱を雪がんとし、僕にはおしるこを一つ、僕にはお雜煮を下さいと、食ふは食ふは、お給仕の滿明君大まごつき、勝手元では奥樣が一人の女中を相手に大車輪の體、二時頃辭して各自家路に向つた。腹は滿腹顏は何れも櫻色、誠に景氣がよかつた。

『それから四日には、綱町道場の稽古始兼鏡開の式を行ひ、且つ寫眞を撮つた。此の日寄宿舍の連中が發起となつて、肉雜煮を食つた。餅は池野初段の寄附、肉は會費で買ひ、ねぎ及び砂糖は寄宿舍の賄から貰つたので間に合せた。其他に守谷初段の守口漬の寄附は、思はず食を進めた。猶藤原三級寄附の菓子は、食後のケークとして遺憾なく皆の腹を滿たした。四日からは前よりも尙元氣で稽古した。雜煮餅を食つた爲め、大いに元氣が付いたのであらう。八日九日と學校の始業日近くなるに從つて、歸つて來る人が殖えて、稽古は益々盛になつた。』（遠馬生）

一六　大正元年史

（一）寒稽古

二月十一日寒稽古終了會を開催、皆勤者は十二名の有段者、四十六名の有級者、其他七十名、之に先輩湯本、塚本（太）盛田の三氏、外來者竹內、高橋、松島の諸氏加はりて盛大であつた。

（二）卒業生送別紅白勝負